

戦時下のペン

館長 今川 英子

「戦争は絶対に負けてはいけないのだ」「真っ赤な太陽、大陸の夕日はこんなに大きいものだろうか、本当に大きな大きな夕日が沈んでいく。今日一日何事もなかったかのように」

林芙美子が南京や漢口従軍時に書いた作品の一部ではありません。当館で開催していた「ペンと戦争」展をご覧になった地元在住のNさんが、読んでほしいとお持ちになられたお父上の手記で、一九三七（昭和一二）年七月、北支戦線での初めての戦場体験を綴ったものです。八〇年の歳月を超えて差し出された芙美子にも似た文章には、戦争の悲劇が克明に記されていました。

北九州ゆかりの作家である林芙美子と火野葦平は先の大戦において最も最前線を体験した作家です。戦後八〇年の節目にあたり、当館では二人が戦争とどのように向き合ったかを、出来る限り資料を渉猟して展覧を試みました。刊行作品に加え、活字になっていない未公開資料も紹介しました。公刊を意識せずに記された文章や書簡には、作家以前の一人のひととしての繊細な心の動きや葛藤、思索が自ずとにじみ出ています。

火野葦平は日中戦争の当初からアジア・太平洋戦争末期のインパール作戦まで断続的に従軍しました。「白骨街道」と言われた退却時の悲惨な戦場の現実を描きながらも、時に文学の使命と国家への忠誠の狭間で揺れました。

林芙美子は女性としてただ一人、最前線へ赴き、兵士たちとともに泥土にまみれながら作家として「漢口一番乗り」を果たしました。メデイ

アは「勇敢な行動」として話題性をもって賞賛しましたが、同道した男性作家たちは、「抜け駆け」として皮肉まじりに揶揄しています。さらに芙美子の女性的感性とも言われる身体性に密着した描写は、女性評論家からはルポルタージュとして客観性に欠けると酷評されました。その背景には戦時下の「男」と「女」という社会的役割や権力関係が透けて見えます。このような当時の生々しい主観の発露や率直な人物批評、人間臭い関係やそこから生じる苦い葛藤なども、今や時間が洗いざらしてくれ、作家林芙美子が何を書こうとしたかを正確に読み取る論が増えつつあります。ことに芙美子の場合、当時交わされた書簡からは、九鬼周造や成瀬無極など思いがけない人物との交流を伺い知ることが出来ます。それを辿ることで、作品の行間にひそむ響きがいっそう鮮やかに感じられ、奥行きのある一行に出会うこともあります。

戦争当事国にならなかった八〇年ですが、世界のどこかでは依然として戦火が絶えず、日常が一瞬で壊される光景が毎日のように報じられています。そのような現実に触れるとき、戦争を生きた作家たちの言葉は、「体験が経歴化され」「いま」を問い直す鏡として私たちの前に立ち現れます。時代の記憶をつなぎ、明日を想い描く想像力を育んでいくのです。

ところで高校時代に大好きだった世界史の授業は、試験は必ず論述式で暗記は必要ありませんでした。今になって先生の歴史教育への深い志しに心からの敬意を表すものです。

目次

- | | | | |
|-----------------------------|---|--|---|
| ○ 巻頭コラム「戦時下のペン」 | 1 | ○ 小倉昭和館で映画の協賛上映 | 7 |
| ○ 第36回特別企画展 | 2 | ○ 朗読会 | |
| 「ペンと戦争—火野葦平、林芙美子の場合—」 | | ○ 共催「毛筆で描く……村田喜代子の世界」（第47回草書道展） | |
| ○ 展示室より 企画展資料紹介 | 3 | ○ 劉寒吉 碑前の集い | |
| 川端康成から火野葦平あて書簡／林芙美子の詩稿「望郷」 | | ○ 森鷗外を偲ぶ会 | |
| ○ 開会記念講話 | 4 | ○ 宗左近忌・左近絵巻構想展 | |
| 「戦場を見つめる —火野葦平・林芙美子の日中戦争—」 | | ○ 林芙美子忌の集い | |
| ○ 特別講演会 | 5 | ○ 友の会自主企画 | |
| 「物語と戦争 —小説は戦争をどう描くのか—」 | | ○ 展覧会開催予告〔第37回特別企画展〕 | 8 |
| ○ 文学講座1「広東からマニラへ —戦地の文化運動—」 | 6 | 「原作出版80周年 きかんしゃトーマスの世界展—はたらく機関車たちのおはなし—」 | |
| ○ 文学講座2「芙美子と戦争」 | | ○ お祝い、お悔やみ／寄贈者・提供者、提供雑誌 | |



北九州市立文学館では、ゆかりの文学者として火野葦平と林芙美子を顕彰していますが、奇しくも二人は、戦時下の代表的な従軍作家としても知られます。戦後八〇年にあたり、戦時中の二人の歩みをとおりして、文学の側面から戦争を考える企画展でした。

企画展では、時系列に沿って日中戦争、アジア・太平洋戦争で火野葦平と林芙美子がどのように戦争と関わり、どのような言葉を残したのかを、多くの直筆資料からたどりましました。

会期中は家族連れや若い方の姿も見られ、若い世代の戦争を知ること、戦争経験を継承していくことへの関心の高さがうかがわれました。

各イベントのほか、二回の展示解説にもたくさんの方にご参加いただきました。コンパクトな図録も発行しています（定価500円）。

○構成

1 日中戦争 1937 —

日中戦争まで／日中戦争のはじまり／ペン部隊／日中戦争の長期化

【視察と報告】／【検閲、発禁】

2 アジア・太平洋戦争 1941 —

アジア・太平洋戦争の開戦／戦局の悪化

【ペンによる報国】

3 終戦 1945 —

1945／それぞれの戦後

（資料点数＝約一七〇点）

来場者の声（アンケート）

・非常にポリリウムがありながら、見やすい展示でした。とても面白かったです。戦争を違う角度から見る事ができて新鮮でした。ありがとうございました。

（50代・熊本県）

・少し前に高校の部活動（演劇）で昔の門司港や北九州をテーマに作品を演じたことがあり、その中に林芙美子が登場するので、そこから興味をもって、今回この企画展に来ました。今までもある程度ネットや本で調べたりしたのですが、やはり実物、直筆の物を実際に目で見ると、また感じるものが違いました。とても考えさせられ、楽しむことができました。

（16～19歳・小倉南区）

・今日が八幡大空襲の日だったので寄らせてもらいました。家族が「考えさせられた」と話してくれたので来ましたが、とても分かりやすく、よかったです。戦争という事態に抗えず、巻き込まれたり、それ以上のことになつてしまふおそろしさを感じました。日本が二度と戦争を起こさず、また起こされない世の中であるように、日々できることをしていきたいと思いました。

（40代・八幡西区）

開会記念講話

「戦場を見つめる―火野葦平・林芙美子の日中戦争―」

二〇二五年七月一九日

企画展の開会を記念して行われた、五味淵典嗣さん（早稲田大学教授）の講話の抄録をご紹介します。

日中戦争期、アジア太平洋戦争期の文学や従軍記で、政府や軍がどのように表現に制約を加えていたか、人々がどのように受容していたかを研究しています。本日は、火野葦平や林芙美子の言葉と現在進行形で展開されている戦争や暴力の問題との繋がりを意識しながらお話ししたいと思います。

最初に火野葦平の代表作である「麦と兵隊」の末尾の一文、「私は悪魔になつてはいなかった。私はそれを知り、



五味淵典嗣さん

深く安堵した」を取り上げます。中国兵の捕虜が殺害される場面です。ここには、戦場で現実に悪魔のようになってしまった人を見、自分自身もいつかそうなってしまうかもしれないという怯えを読み取ることができます。実際に火野は「戦友に懇ふ」という文章で、戦場で抜き差しならない暴力を生きてしまった兵隊が、復員後、日常に帰ることの難しさを書いていきます。こうした火野の認識は重要です。パレスチナやイラクなど、二一世紀の戦場について書かれた本でも同様の表現に出会うことがあるからです。

林芙美子からは、『婦人公論』一九三八年三月号に発表した「私の従軍日記」の中の一文を取り上げました。「全く、石にしがみついても敗残国にはなりたくないものだと思ひました」。私は、この林の認識がどんな見聞や経験から生まれたかがとても気になります。

一九三八年三月号の雑誌は、日中戦争と文学を考えるうえで非常に重要です。この月の『中央公論』は石川達三「生きている兵隊」で即日発売禁止となり、日中戦争期最大の筆禍となりました。『文藝春秋』は火野葦平「糞尿譚」を掲載、火野はこの受賞をきっかけに陸軍報道部に引き抜かれます。『改造』

には林芙美子が、女性の書き手として一番乗りとなった南京取材をもとにした「黄鶴」を発表しています。しかもこの三者は日本軍の南京占領直後から一九三八年一月にかけて、相次いで南京に滞在していました。南京はたいへん大きな街ですし、それぞれの作家たちが何を見たかはわかりません。ですが、何かを感じたのは事実でしょう。作家たちが残した言葉から何を受け取ることができるのか、読者の側の想像力が試されているのだと思います。

例えば石川は、銃後に戦場の厳しさを伝える意図で兵士に取材し「生きている兵隊」を書いたと言っていますが、日本政府が見せたくなかった戦争の一面を書いてしまった。「黄鶴」で林は、占領後の南京で兵士たち相手の性的なサーヴィスを「商売」として始めようとする女性の姿を書き込んでいます。その一方で林は、南京城内で出会ったはずの日本軍兵士のことはほとんど書いていません。つまり林は明らかに検閲を意識して、現地での見聞を選択的に書いています。このように作品の言葉をつぶさに見ていくと、文学者たちが戦場について何を書いたのかというだけでなく、何を書かなかったのか、という問いが浮かび上がってくるわけですね。

最後に、火野や林の残した言葉を、現在進行形の戦争や暴力の問題にどう繋げることができるかを考えます。格好の手掛かりとなるのが、浅田次郎さ

んの「長く高い壁」という小説です。浅田さんは角川文庫版『麦と兵隊・土と兵隊』の復刊にも尽力してくださったのですが、この小説は火野の作品世界を強く意識した内容になっています。一九三八年、ちょうど従軍ペン部隊のタイピングで、ある作家が軍から万里の長城のふもとで起こった殺人事件を解くよう要請されるというミス터리です。タイトルの「長く高い壁」は非常に示唆的な比喩になっています。例えば東京の参謀本部から見る戦場と、そうした連中が駒のように動かしていた兵士たちから見た戦場とが対比的に描かれていきます。上から見下ろす視線と下から見上げる視線。この差異は大事です。

現在の戦場はドローンが駆使される（上から見る戦争）となっています。我々がメディアを通して見聞きするのも、そうした上から見た、漂白された情報です。そうであるからこそ、「地べた」から見返される視線の存在を意識的に考えていかなければならない。火野葦平や林芙美子が実際に見聞きしたような、「地べた」で銃を向け、相手から向けられてもいる側から見た戦場を想像する訓練が必要なのではないかと思うのです。戦争の中の言葉を扱うこの企画展を通して、彼らの言葉から見えてくるもの、想像できることを、ぜひたどり直してほしいと考えています。

特別講演会

「物語と戦争——小説は戦争をどう描くのか」

二〇二五年八月二〇日

企画展を記念して開催された、奥泉光さん（作家）の講演の抄録をご紹介します。

会場 J・COM北九州芸術劇場小劇場



奥泉光さん

アジア・太平洋戦争と現代の暴力を幻想的な形で結び付けた「石の来歴」という小説で一九九四年に芥川賞を受賞しました。芥川賞は目指していませんが「目指しているんですよ」と言われ、とってしまおうと、その作品が代表作のように言われる厄介な賞です。自分ではやや不満が残っていて、同じ題材・テーマで少しずらして書き直した

のが「浪漫的な行軍の記録」（二〇〇二年）です。このように、あの戦争の問題をずっと考え続けてきました。

この八〇年、日本は直接的には戦争をしないで済んできました。これだけ長い時代を戦後として括っているのは日本くらいです。問題もはらんではないですが、あのときの「戦争は本当にいやだ、もう絶対したくない」という国民の強い意志が一つの原動力になって、この長い戦後を維持させたのも間違いないと思います。だいぶ前から「新たな戦前」と言われていますが、私たちは、もう戦争をしないという意識を持ったうえでこれからの時代をどう作るかという課題に面しています。

さきの戦争をしっかりと「経験」として我々が持つことは何より大事です。「体験」と「経験」を分けるのは非常に有効な考え方です。「体験」は個別の一回限りのもの。「経験」は体験を言語化し、他者に伝えられるかたちにしたもの。私も含め、ここにいる皆さんのほとんどが戦争は体験されていません。でも、言葉やメディアを通じての表現で、経験し、共有することは可能と私は考えます。繰り返すことも、世代を超えて伝えていくことも可能で

す。八〇年前「もう戦争はいや」と直接感じたかたはいなくなっていく、強い気持ちは消えていくでしょう。でも、その体験を経験化して、強い気持ちを継承していくことが必要です。

アジア・太平洋戦争を始めた時点では、戦争の是非はおいておいても、一応、合理的な見通しがないわけではなかった。しかし、サイパン島陥落以降は絶対に勝ち目はなかった。指導者はわかっていたのに必勝を叫び続けた。でも、あとから「勝機はあった」と言う人はあまりいなくて、皆「もうだめだと思っていた」と言う。今も、組織の失敗を、皆があとから「いや、私もだめだと思っていた」と言う現象です（笑）。八〇年前の彼らにリアリティーを感じるように、私たちの行動は変わってはいない。同じような失敗をしないように、出来事を経験化し、繰り返し問い返すことが大事です。

具体的に、一番中心になるのは歴史、文学です。歴史学は史料を徹底的に重視し、歴史叙述を作っていく。史料にないことは語れない歴史学に対し、文学は踏み込んで語れる可能性を持っています。日本史の主語は日本ですが、隣には朝鮮半島の人を中心にした歴史が当然あり、同じ出来事でも、全然違う歴史が描かれる場合がある。つまり、歴史もどうしても物語性をはらまざるを得ない。また、歴史と文学に共通し

ますが、流通してしまっている物語を批判し批評するのはものすごく大変です。人は信じたい物語を信じる性質がある。

真珠湾攻撃の手記も、同じ連合艦隊でも巨大な航空母艦と潜水艦では体験が異なるし、士官と下層の兵隊では違う世界が見えています。継承する我々は、多角的に多層的にとらえることが重要です。ひとりひとり異なるすべての視点を取り込むことはできないけれど、単一の構図だけでは物語に足をすくわれてしまいますし、「経験」になりません。

世界的に、それぞれの国民国家が各自の物語を強く主張し、物語がせめぎあう危機の時代を迎えています。人類の多くは「自分が信じているから正しい」と信じ、正しさの押し付け合いになっている。私たちは「自分が完全ではない」と受け入れ、効率は悪くても民主主義で対話していかなければならないのです。こういうとき、物語は単純化してはいけません。単一の物語、正しいという物語には、揺さぶりをかけねばなりません。パターン化された歴史や泣かせる物語を消費してただ号泣するだけではあの戦争の経験化にはつながらない。わたしたちは、泣くと同時に笑ったり怒ったり、考えさせられねばならない。えも言われぬ感情を喚起しないといけないのです。

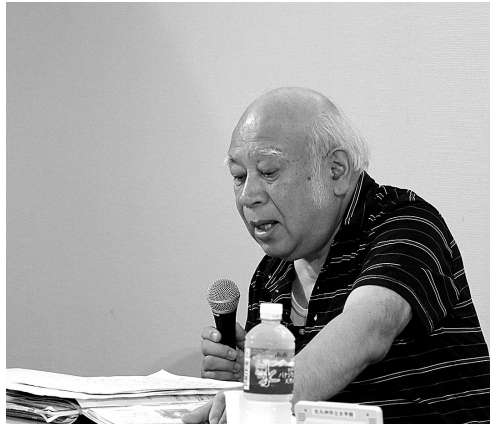
文学講座1

「広東からマニラへ―戦地の文化運動」

二〇二五年八月三〇日

講師…坂口博さん

(火野葦平資料の会会長)



坂口博さん

初めに、火野葦平と、陸軍の宣撫活動の一環として発行された雑誌との関わりについて話されました。

南支派遣軍報道部が一九三九年五月から中国・広東で発行した雑誌「兵隊」(7号まで「へいたい」と、比島派遣軍報道部がフィリピン・マニラで四二年七月から発行した「南十字星」と、両誌の創刊に葦平が深く関わっていたことを話されました。このことは葦平自身の著述ではほとんど言及されていませんが、「へいたい」発行時の思い出を語っている貴重な資料として、小倉中学「会誌」8号(一九四〇年三月)

に発表した「兵隊と活字」の一文を紹介されました。葦平は、戦地で活字に飢えていた兵隊たちに非常に喜ばれたと語っています。また、二誌とも、葦平が編集から離れたのちも編集スタイルは変わらなかったことも指摘されました。「南十字星」は全号が確認されるとさらに研究が進むであろうとも話されました。

戦地からの帰還作家の小説を含め、終戦以前に書かれた戦争文学についての研究がいまだ途上であることにも言及されました。当時は戦争の一面面しか描けなかったことを踏まえたうえで、の文学による日中戦争史構想など、デジタル・データなども活用したうえで、今後さらに研究を進めていく必要があると締めくくられました。

来場者の声 (アンケート)

・ 資料が充実しており、たいへん勉強になりました。特に、帰還作家の特徴(世代構成や九州出身者が多い)は、今回の講話で初めて気づくことができました。

(40代)

・ 火野葦平の戦時下の活動や、その周辺のことについてよく理解できました。

(40代・八幡西区)

文学講座2

「芙美子と戦争」

二〇二五年九月一三日

講師…今川英子

(北九州市立文学館館長)

日露戦争の前年(一九〇三年)に生まれ、サンフランシスコ平和条約調印の年(一九五一年)に亡くなった林芙美子の生涯を、戦争に終始した人生として捉え、海外体験に注目しながら、戦争に対する芙美子のまなざしをたどりました。

はじめに、芙美子の低い目線の特徴を、現地の人々の様子や生活を記す台湾旅行の紀行文から紹介しました。パリへ向かったシベリア鉄道の旅でも、当時は理想化されていたロシア革命の貧しい現実を見つめています。観念によらず、地に足をつけて生きること、目を凝らす姿勢は一貫していると指摘しました。



今川館長

パリでは、辣腕のジャーナリストとも交遊し、日本の置かれた政治的情勢に知識を持っていたと考えられます。日中戦争後に発表した文章では、検閲をいくぐる表現を駆使しながら、自らが見た戦争の現実を書き残しています。南京、漢口と「一番乗り」の戦地入りをメディアからもてはやされる一方、深い虚無感を共有していたという、九鬼周造との精神的なつながりを示すエピソードも紹介されました。

日本の満洲移民政策とヨーロッパの植民地政策を対照的に見通す芙美子の眼は、大東亜共栄圏の限界を察知していたため、南方派遣後は、積極的な報告文を書かなかつたのではないかと結論し、芙美子の再評価を促しました。

来場者の声 (アンケート)

・ 内容の濃い密な講演をありがとうございました。時の流れと全体と林芙美子の立場と気持ちがよく理解出来、本当にすばらしいお話でした。時間不足が残念です。

(70代・小倉南区)

・ 緻密な資料で、林芙美子の心を辿ってご講演いただき、心に沁むものがありました。

(70代・小倉北区)

小倉昭和館で

映画の協賛上映

二〇二五年八月二〜八日

企画展に協賛して、火野葦平・林芙美子の映画を上映いただきました。火野葦平原作「陸軍」(松竹 一九四四年/監督:木下恵介、出演:田中絹代、笠智衆)、林芙美子原作「下町 ダウンタウン」(東宝 一九五七年/監督:千葉泰樹、出演:山田五十鈴、三船敏郎)の二本です。「陸軍」は終戦前の博多でロケされており、当時の街並みを見ることが出来ます。

八月二日は、上映後に今川英子館長がスペシャルトークを行いました。企画展の展示資料も紹介しつつ、時代背景や二人の状況を踏まえ、両映画の魅力を紹介しました。一九四九年に発表された「下町」は、戦後わずか四年目でまだ厳しい社会状況下でも、生き抜いていくとする女性たちの姿を描き出していることなどを解説しました。



朗読会

二〇二五年八月一〜七日

直方林芙美子顕彰会の野口和夫さんによる朗読会を行いました。

作品は、火野葦平「麦と兵隊」(「改造」一九三八年八月号)、「桃太郎」(「文藝春秋」一九五四年一二月号)、林芙美子「夜福」(「週刊婦人朝日」一九四〇年四月号)、「お父さん」(「少国民の友」一九四六年一〜一〇月号)で、いずれも、近景、背景に戦争があります。野口さんの朗読では、厳しい現実に向き合い、受けとめる人の温かさがしみ伝わり、参加者も聞き入っていました。

参加者の声 (アンケート)

朗読の良さがわかりました。多くの人と充実した時間を共有することができ、有難いことです。ひとり読書とは違う、ことばの重さを感じました。

(60代・小倉南区)

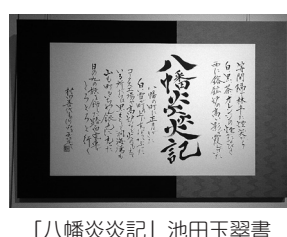


野口和夫さん

共催「毛筆で描く……村田喜代子の世界」(第47回光草書道展)

二〇二五年四月二六日〜五月六日

光草書道会(橋村雅榮会長)主催の書道展は、北九州ゆかりの小説家である村田喜代子さんの作品世界をテーマに、会員それぞれが作品と印象的な文章を選び、書作品として表現しました。



「八幡炎災記」池田玉翠書

村田さんご本人による特別講演では、「熱愛」「新古事記」などの作品をめぐって会員との間で熱心な質疑応答が交わされました。

劉寒吉 碑前の集い

二〇二五年四月二〇日

小説家・劉寒吉の命日にあわせて、劉の母校である小倉商業高等学校の主催で、碑前の集いが開催されました。劉のご遺族のご挨拶、図書館長、文学館長の講話などのち、参加者全員で劉作詞の小倉商業高校校歌と「紫川の歌」をブラスバンドの演奏で合唱。雨中、文学碑前で献花を行いました。

森鷗外を偲ぶ会

二〇二五年六月一九日

森鷗外の小倉赴任を記念する恒例の集いが紫川河畔の文学碑前で開催されました。その後会場を移し、作家の多胡吉郎さんによる記念講演会「鷗外の遺品・流転の運命と森於菟」が行われました。

宗左近忌

・左近絵巻構想展

二〇二五年六月二一日

宗左近を偲ぶ集いが、戸畑図書館前の記念碑「鐵偶」前で開催されました。続いて、宗左近ファンクラブ・花の会会員で美術家の春野修二さんが手がけた「左近絵巻構想展」のギャラリートークが行われました。宗の詩集『炎える母』の空襲の場面を中心に、イメージ画、詩について、参加者と語り合いながら進められました。



林芙美子忌の集い

二〇二五年六月二八日

林芙美子忌の集いが門司の小森江西市民センターで開かれ、地域の方々と関係者が参加しました。今年は今川館長による特別講演「林芙美子と門司」が行われました。最後に献花を行いました。芙美子を偲びました。

友の会自主企画

友の会では、江口恵子さん(友の会副会長・九州女子大学特任教授)を講師に今年も「やさしい文章教室を開催(7月26日、8月23日)。小学生七人、中学生四人が参加しました。

また、初めての企画として「文学館文庫読書会」を実施(6月14日、9月6日)。第一回は課題作品「無法松の一生(富島松五郎伝)」について活発な意見交換がありました。これからも継続して開催する予定です。

原作出版80周年

THOMAS
& FRIENDS

80

きかんしゃ トーマスの 世界展

はたらく機関車たちのおはなし

2025年
10月25日(土)
～12月21日(日)



© 2025 Gullane (Thomas) Limited.
© 2025 HIT Entertainment Limited.

● 展覧会開催予告 ●

今秋の第37回特別企画展では、「原作出版80周年 きかんしゃトーマスの世界展—はたらく機関車たちのおはなし—」を開催します。

1945年、イギリスの牧師、ウィルバート・オードリーが、息子のクリストファーに即興で語りきかせた機関車の話をもとにした「The Railway Series（汽車のえほん）」が出版されました。この絵本から始まった物語は「きかんしゃトーマス」として世界中で愛され、今年で80周年を迎えます。

本展では、絵本の原画や模型などの貴重な資料の展示のほか、デジタルコンテンツを用いた参加型コーナーなどを設けます。「きかんしゃトーマス」の世界を存分にお楽しみください。

お祝い

・川本三郎さん（評論家）が『荷風の昭和』で第24回小林秀雄賞を受賞されました。
心からお祝い申し上げます。

お悔やみ

・井生定巳さん（「劇団青春座」前代表）二〇二五年五月三〇日にご逝去。85歳。
・岩崎京子さん（児童文学作家）二〇二五年七月一七日にご逝去。102歳。
心からお悔やみ申し上げます。

寄贈者・提供者

阿木津英、朝比奈秋、有馬多賀子、有森信二、井岡道子、石川啓子、石太郎、井上靖記念館、茨木市立川端康成文学館、いわき市教育文化事業団、大原鉄平、岡田功、岡山シティミュージアム、大阪俳句史研究会、大佛次郎記念館、尾道市文化協会、片山博、風花随筆文学賞実行委員会事務局、菊池寛記念館、岸原清行、北九州市立美術館、北九州市立松本清張記念館、紀伊國屋書店、くまもと文学・歴史館、群馬県立土屋文明記念文学館、さいたま文学館、さかい利晶の杜、佐久間庸和、桜川牙子、佐藤幸乃、柴田康弘、司馬遼太郎記念館、勝央美術文学館、新宿区立漱石山房記念館、新葉館出版、鈴木研、鈴木結生、銭谷十九雄、全国文学館協議会事務局、筑紫野市歴史博物館ふると

2025年10月1日発行 北九州市立文学館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
<https://www.kitakyushucity-bungakukan.jp/>

■開館時間

9:30～18:00（入館は17:30まで）

■休館日

毎週月曜日
（月曜日が休日の場合は開館し、翌日が休館）
年末年始

提供雑誌

館ちくしの、恒成美代子、鶴岡市立藤沢周平記念館、津和野町立森鷗外記念館、東京都江戸東京博物館、徳島県立文学書道館、土曜美術社出版販売、日本近代文学館、日本現代詩歌文学館、人参ひろ美、沼津市芹沢光治良記念館、野田宇太郎文学資料館、野見山悠紀彦、姫路文学館、福岡県高等学校国語部会、北九州・筑豊地区部会、福岡県詩人会、福岡市総合図書館文学・映像課、福岡ユネスコ協会、ふくやま文学館、前橋文学館、岬の分教場保存会、水落龍勝、水口一志、宮本苑生、毛利一枝、森鷗外記念会、山口公和、吉田葎、吉村昭記念文学館、和歌山市文化振興課

藍、青嶺、馬酔木、阿蘇、花鶏、海、総合せ、沖、GAGA、海峡派、季刊午前、北九州国文、九州文学、今日の花、鯨々、笹、さんぽあ、自鳴鐘、書馨、scripta、青穂、川柳くらがね、川柳マガジン、川柳むらさき、空、鬣、天籟通信、長塚節の文学、新墾、虹野、浜木綿、ふよう、Brass、ぼち袋、八雁、遼、りんどう